「立身出世主義」の破綻と「国民の道徳」

――ドストエフスキーの初期作品をめぐって――

高橋　誠一郎

はじめに

日本における比較文明学の先駆者の一人である福沢諭吉は、1879年に書いた『民情一新』で、日本に先駆けてロシアの「文明開化」を行ったピョートル大帝の改革を高く評価する一方で、西欧の「良書」や「雑誌新聞紙」を見るのを禁じただけでなく、国内の学校においては「有名なる論説及び学校読本を読むを禁じ」、さらには「学校の生徒は兵学校の生徒」と見なしたニコライ一世治下の政治を「未曾有の専制」と断じた[1]。

実際、ピョートル大帝の死後も続けられた「富国強兵」策や優れた業績をあげた若者には「立身出世」の機会を与えるなどの近代化政策を取ることによって、ロシアはナポレオン一世率いる強国フランスを破るほどの強国となった。しかし、「国家」の強大化に反比例する形で民衆、ことに農民の「奴隷化」が進んだのである。しかも、「祖国戦争」で奇跡的に勝利を収めたことにより、それまでひそかに抱いていた西欧への劣等感が拭われたことで、ロシアのナショナリズムも昂揚した。ロシアの文部大臣となったウヴァーロフは、欧化の流れの中でロシアの若者にも影響力をもち始めていた「自由・平等・友愛」という理念に対抗するために、「ロシアにだけ属する原理を見いだすことが必要」と考えて、「わが皇帝の尊厳に満ちた至高の叡慮によれば、国民の教育は、正教と専制と国民性の統合した精神においてなされるべきである」とする通達を1833年に出したのである。

高野雅之は国民にたいしてこの「正教・専制・国民性」という「ロシアの理念」の遵守を求めたこの通達を「ロシア版『教育勅語』である」と呼んでいるが、国内の劣悪な政治状況を放置したまま「為政者」にではなく「国民」に「道徳」を課し、これを批判する者を厳しく罰したこの通達は、ロシアにおける「国粋」の流れを強化するとともに、これに対する強い反撥をも招いた[2]。

ドストエフスキーが生涯敬愛し続けたプーシキンは、このようなロシアの二重性を多くの作品で見事に描き出していた。たとえば、叙事詩『青銅の騎士』（1833年）においてプーシキンは、まず序詩で「ぬかるむ沼」から現れたサンクト・ペテルブルクを「わたしは愛する、ピョートルの生みだした都市よ。わたしは愛する、厳格で均整のとれたおまえの姿を」と詠ってその美しさを讃えた。しかし、彼はそれに続く長詩でペテルブルクを襲った大洪水で最愛の婚約者を失った悲しみから茫然として街をさまよい、ついには「青銅の騎士」像に追いかけられるという強迫観念に駆られて狂死した若い官吏エヴゲーニイの悲劇を詠いあげたのである[3]。

「青銅の騎士」像がピョートル一世を記念するためにエカテリーナ二世によって建てられていたことを想起するならば、プーシキンは「ペテルブルクの物語」という副題を持つこの作品

で、「富国強兵」政策による庶民の悲劇を明らかにしたのである。

作家ドストエーフスキイ（1821～81年）の前半生は、「暗黒の30年」と称されるニコライ一世の治世（1825～55年）とほとんど重なっているのである。『貧しき人々』（1846年）で文壇にデビューした彼は、立身出世を望んだ中年の官吏の野望の破綻を描いた『分身』などの作品でしばしば狂気をテーマにするとともに、『ポルズンコフ』（1848年）では賄賂の問題点を鋭く突いた。

神川正彦は西欧の「一九世紀〈近代〉パラダイム」を根本的に問い直すには、「欧化」の問題を「〈中心―周辺〉の基本枠組においてはっきりと位置づけ」ることが必要であると指摘した[4]。本稿では比較文明学における「欧化と国粋」という視点から、立身出世の負の面を鋭く描いたドストエフスキーの『分身』などの初期作品とゴーゴリの『友人達との往復書簡選』をめぐる論争などを分析することにより、ロシアの「辺境」と位置づけられたウクライナ出身のドストエーフスキイの父ミハイルや作家ゴーゴリのアイデンティティの危機の問題を考察してみたい。この作業を通して、ドストエフスキーの問題意識が「個人の自立」の認識や官僚制度の問題点の批判だけでなく、さらに「自由」のうちにある「欲望」や「権力」の問題など、「近代的な＜知＞」のあり方そのものについても根源的な反省を試みていたことを明らかにできるだろう。

第１節　「立身出世の望み」と「欲望の模倣」――「分身のテーマ」

日本の近代化の推進者と言える福沢諭吉は、個人の能力が生かされる社会を熱望して、『学問のすゝめ』において、「立身出世」を可能にする学問の効用を唱えた。日本より約150年も前に「文明開化」が行われたロシアでも、ピョートル一世治下の1722年に、一等官から一四等官まである新たな官等制度が制定されており、すぐれた才能を持つ若者が一代で貴族にまでも立身出世できる可能性がすでに生み出されていた。ピョートル大帝の改革により生まれた新しい貴族は、西欧の言語を習得して専門的な知識を有することで、「富国強兵」や「国益」のために尽くした明治維新後の日本の官僚と同じような新しい人々であった[5]。

ドストエフスキーがその第二作『分身』において描いたのは、上司の娘との結婚によってなんとかして出世しようとした、中年のさえない九等官ゴリャートキンの自我の分裂の問題であった。ロシアでは九等官から貴族に列せられたのでこの身分は高いようにも見えるが、一代限りだった九等官は領地などの世襲が認められるようになる八等官とは大きな違いがあったのである。「自分がちっぽけな人間であることを、私は遺憾に思っておりません」[6]（Ⅰ・161）と語りつつもゴリャートキンは、五等官の娘と結婚することによってさらに出世をしようと試みているのである。彼が歩もうとしている道は、人々に対する同情心を持ちつつ物質的な貧しさから分裂の危機に直面した第一作『貧しき人々』の主人公ジェーヴシキンとは正反対の道であると言えよう。だが、「上位者」の「欲望」を「模倣」することによって挫折するという点では、両主人公は共通しているのである[7]。

そして、ここでもドストエフスキーはゴーゴリとプーシキンにおける「発狂」や「分身」の

テーマを受け継ぎつつ、さらに深めていると言えよう。たとえば、ゴーゴリは『狂人日記』で「なぜ俺は九等官なのだ、またどうして九等官どまりなのだ？　もしかしたら俺は九等官なんかじゃないのではあるまいか？」と「執拗に自問を続け、やがては疲れはてて病的になった頭脳に自分を＜スペイン王＞と見なす奇怪な想念」を抱くにいたったポプリーシチンの「発狂」を描いた。ペレヴェルゼフはこの作品と『分身』の主人公が、二人とも「九等官であり、ともに勤務する役所の長官の娘に」かなわぬ恋をし、ついには発狂することをあげて両者の共通性に注意を促している[8]。

さらに、ゴーゴリは『分身』に直接的な影響を与えた短篇小説『鼻』において、「鼻にかける」「鼻が高い」などの常套句が人格ときわめて深いつながりを持っていることを示すことにより、床屋で誤って剃り取られた「鼻」が、独立した人格として外套を羽織り、馬車を乗り回すという荒唐無稽な話を説得力豊かに語っていた。

こうして、ドストエフスキーが当時ゴーゴリの作品からの強い影響下に作品を書いていることは明らかだろう。ただ注目したいのは、ドストエフスキーはここに「ライバル」という第三者を入れることにより、「立身出世」という制度の影の部分にまで迫り得ている点である。このことをルネ・ジラールは「三角形の欲望」という概念で上手に説明しえている[9]。すなわち、ジラールは競りや恋人を争うライバルなどの媒介者の存在によって、人や物などの対象への欲望はいっそう強まるとし、このことは市場経済における広告にも応用されると指摘して、商品を売る場合には、商品と購入者の間に、映画スターやスポーツ選手を媒介者として入れることにより、商品への欲望がいっそう強まるとしているのである。

この概念はゴリャートキンの行動についてもよく説明しうるだろう。すなわち、ようやく九等官まで立身出世をしたゴリャートキンは、自分の後ろ盾だった五等官の娘との結婚をも夢見るようになる。だがその時、彼の前にライバルとして現れたのが、上役の甥で自分を飛び越えて八等官に昇任した若者だった。

こうした強力なライバルの出現は、ゴリャートキンの欲望をさらに刺激し、彼は流行の服を着て、召使いにも流行の服を着させて立派な馬車をしたてて、上司の娘のための晩餐会に招かれざる客として出席しようとする。立身出世の競争に敗れたゴリャートキンの「自我」はまさに分裂の危機に瀕していたのである。

竹内洋は福沢諭吉の『学問のすゝめ』が、人間の平等を強く主張するとともに「立身出世の焚き付け読本」ともなったとし、こうした立身出世主義が日本に広く素早く定着した理由には、「優勝劣敗による適者生存」という「社会的ダーウィニズム」があったことを指摘している。つまり、「立身出世主義」は、「脱落や落伍の恐怖と不安の原風景からの脱出航路でもあった」のである[10]。

実際、『学問のすゝめ』において「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし。唯学問を勤(つとめ)て物事をよく知る者は貴人となり、富人となり」と書いた福沢諭吉は、それに続けて、「無学なる者は貧人となり下人となるなり」と書いて、「実学」を学ばないと没落して貧人や下人となるという不安感をも煽っていた[11]。

このように見てくる時、ゴリャートキンの強烈な「立身出世」へのあこがれの裏には、それ

に優るとも劣らない激しい「脱落」への恐怖が隠されていることに気づく。たとえば、ライバルの若者の昇格を祝う席でのゴリャートキンの祝辞を通して、ドストエフスキーは彼の精神的な焦りを浮かび上がらせるとともに、一四等官の若い同僚たちがすでに彼を見くびるような態度を見せ始めていることを示唆している。つまり、ゴリャートキンは小説に登場する時にすでに「リストラ」される危険のある地位、つまり現代風に言えば「窓際族」だったのである。この意味でドストエフスキーの『分身』は、それまでの分身譚により深い心理学的な深い分析を加えつつ、まさに出世街道から落伍し始めていたゴリャートキンの苦悩をまざまざと描ききっていると言えよう。

しかも、バフチンは『地下室の手記』の主人公が「僕は一人きりだが、彼らは束になってきやがる」と書いていることに注意を払って、「彼にとって世界はふたつの陣営に分裂している。一方は＜おれ＞他方は＜彼ら＞、つまりどんな奴らも例外なく＜他人＞だ」と記している[12]。医師を訊ねて「私には敵があるのです」と語っていたゴリャートキンにも同じことが言えるだろう（Ⅰ・118)。

こうして追いつめられたゴリャートキンは、上司の娘の愛を獲得することに「賭け」て、脱落しかけた「立身出世」のコースを立て直そうとしたのである。冒頭で彼は「これだけの金があれば、人間一匹えらくすることだってできようというもんだ」とうそぶいていたが、それはある意味では、強大な「他者」によって滅ぼされないために、金の力によって「自己」を強大化しようとする防御の方法とさえ見ることも可能であろう。そのために彼は百貨店で、上司の娘の愛を獲得するために、自分の払える額を超えた高級な食器セットや家具、婦人服地などを注文するのである。この時、彼は金の力で一時的に自分を大きく見せようとして借金を重ねる、現代のカード・ローン破産のような事態に陥ろうとしていたのである。

そのことをドストエフスキーはゴリャートキンの言動を通して、きわめて説得力豊かに描いている。たとえば、ゴリャートキンは現代では「仮面をかぶった人間がめずらしくなくなった」ので、「仮面のかげに素顔を見分けることが難しくなった」（Ⅰ・224）が、自分が「仮面をつけるのは、仮面舞踏会のときだけで、毎日のように仮面をつけて人前に出ていったりはいたしません」と語っていた。

しかし、その彼が馬車をしたてて夜会に行く途中でやはり馬車に乗った上司に会うと、「挨拶をしたものだろうか？　声をかけたものだろうか？」とためらい、「それとも、これはおれじゃないというふりをしたものだろうか、驚くほどおれとそっくりだが、まったくの別人という思い入れで、何食わぬ顔をしていたものだろうか？」と思い悩むのだ。そして、結局は「いえ、これは私じゃ、私じゃありませんので、はい、それだけのことでして！」と、自分がゴリャートキンではないかのように装うことで相手を無視したのであった（Ⅰ・113)。この見事な日常心理の描写が後の分身の出現を巧みに予告している。

すなわち、華やかな夜会で直接、愛をうち明けようとして失敗し、打ちのめされたゴリャートキンは、風が唸り、雨と雪が同時に降る橋の上で「あらゆる点で彼そっくり」の人物と出会うことになるのである。

この意味で興味深いのは、川端香男里が一攫千金を夢見てトランプの賭博に挑むが、全財産

を賭けた勝負に負けて発狂するというテーマを描いたプーシキンの『スペードの女王』におけるゲルマンと、ゴリャートキンの「発狂」の場面の描写の間に関連を見ていることである[13]。確かに『分身』におけるドストエフスキーのくどすぎるほど細かい描写を省略していくと、驚くほど『スペードの女王』の描写に似た骨格が現れてくるのである。

「それは恐るべき夜であった。…中略…風はがらんとした人気のない街々を咆哮して、…中略…河岸通りの痩せひょろけた街灯を意地悪くゆすぶっていた…中略…雨と雪が同時に降っていた。…中略…近くにも遠くにも、人っ子一人いなかった。…中略…ゴリャートキン氏一人のみが、絶望を胸に抱きながら、…中略…フォンタンカ河岸の歩道を急いでいるのであった」(『分身』第五章)。

「物おそろしい天気だった──風は咆え、雪は羽毛を引きちぎるように降りしきった。街灯はぼんやりと光っていた。通りには人影もなかった。時折、家路に遅れた客はないかと、鵜の眼鷹の眼、怪しげな馭者がやせ馬に載って通り過ぎた。ゲルマンはフロックだけを着ただけでたたずみながら、雨も雪も感じはしなかった」(『スペードの女王』)[14]。

このようなゲルマンとゴリャートキンの描写の類似性は、ゴリャートキンの行動が立身出世のための最後の「賭け」であったことに注意を促すのである。実際、夜会の翌日にゴリャートキンが役所に出勤すると、昨晩橋の上で出会った「どちらがオリジナルで、どちらがそのコピーか、判定のしようもなかろうと思われた」人物が、新しい同僚として紹介される。ゴリャートキンは予期せぬ事態に動転しつつも、その新人のへりくだった対応や身の上話を聞いている内に、次第に気を許すようになりついにはこう語る。「きみとぼくとは、水と魚、親身の兄弟のようにやっていくのさ。ねえ、ひとつ、うまいこと、二人で巧妙に立ちまわって、こっちも策略をめぐらしてさ、やつらに一泡吹かしてやろうや……」(Ⅰ・157)。

しかし、このような彼のもくろみは、「万遍なくすべての人に」とり入り、「巧妙に立ちまわって」、「策略」をめぐらした新ゴリャートキンによって先取りされて、ゴリャートキンは次第に職場での場所がなくなっていく。そして、ついには愛する女性からの偽りの駆け落ちの手紙でおびき寄せられ、傷ついた心を抱いて夜会の席から馬車に乗せられて精神病院へと去っていったのである。

『ひき裂かれた自己』において精神学者のレインは、精神分裂病質者とは「第一に世界とのあいだに断層が、第二に自分自身との間あいだに亀裂が生じている」人間であると規定した[15]。そのレインは『分身』の「ゴリャートキン氏は、自分で自分からのがれようとしたばかりでなくぜんぜん消滅してしまいたい」と望んでいるという文章を引用して、分身の登場というゴリャートキンの<妄想>は、「自分自身でありたくないというゴリャートキン自身の隠れた意図」と「密接に結びついている」ことを、ドストエフスキーが示していたと指摘している[16]。

さらにチヂェフスキーはドストエフスキーが分身のテーマを『分身』で描いただけでなく、このテーマを人間の根本的な問題としてとらえ、それを生涯にわたって追求したことを具体的に例証しつつ、「分身」の発生が19世紀の倫理的な合理主義によるものだと結論している[17]。たしかに、このような視点から見るとき、「分身」の登場というテーマを描いたこの作品は、19世紀ロシア社会だけでなく、きわめて現代的な色合いをも持っているのである。

さらに、私たちはドストエフスキーがこの作品で「分身」の発生だけでなく、「クローン人間」の予兆とも言えるような奇怪な夢を描いていることにも注目したい。その夢の中では、ゴリャートキンが歩くたびに「あたかも地の底から湧いて出てくるように、彼とまったく瓜二つのゴリャートキン氏、腐敗しきったいまわしい心を持ったゴリャートキン氏が一人ずつ飛び出し」、「まるで鷲鳥の行列のように長くつながって」彼のあとからついてきたので、ついには「首都全体がそっくりさんで溢れ」るという光景が出現するのである（Ⅰ・187）。

この奇怪な夢は何を意味しているのだろうか。この意味で注目したいのは、学校は「国家によって国家のために存在する」というナポレオンの言葉に注目した桜井哲男が、このような要請を受けて、小学校が「誰でも能力があれば上昇できるとする信仰」を生みだし、また「共和制の政治的代理人としての小学校教員は、子どもたちにたいして『上昇の夢』をふきこむ役割を担わされるようになった」と指摘していることである[18]。つまり、「富国強兵」を目指した近代の教育は、一面で個性の自由を謳いつつ、他方では国家の一元的な価値に従うような均等な国民の養育をも担っていたのである。たとえば、ドストエフスキーが深く尊敬したディケンズも、初等教育の問題を鋭く考察した『ハード・タイムズ』において、近代化を担った教員についてこう鋭く批判している。「彼と彼の百四十人ほどの教師は、近年同じ工場で、同時に、同じシステムに基づいて生産されたものだった。ちょうどピアノの脚と同じように」[19]。ゴリャートキンが見た夢は、大量生産される危険性のあるクローン人間を予告しているだけでなく、近代国家の目的を遂行するために、命令に従順で同じように行動する人間を生み出す「近代的な知」のシステムの問題点をも先取りしていると言っても過言ではないだろう。

第２節　「脱落の恐怖」と「自由思想家」という噂――「発狂のテーマ」

こうして、ドストエフスキーは『分身』で「立身出世の望み」と「脱落の恐怖」による「発狂」を描いたが、初期の作品で「脱落の恐怖」と「発狂のテーマ」が見られるのは、これだけではない。中年の官吏を主人公とした短編小説『プロハルチン氏』（1846年）でも、これらの問題が中心的な位置にあり、同じ下宿に住む人々から様々な噂を吹き込まれ自分がくびになるのではないかという不安に駆られた主人公は、役所が廃止になると言ってしまう。するとこの発言が言質に取られて、他の住民から「お前さんは危険思想家だぞ！　すぐさま訴えてやる！」と脅されて、ついに狂死してしまうのである。

ドストエフスキーは『プロハルチン氏』が検閲により「ずたずたに削られて…中略…骸骨だけが残りました」と手紙の中でこぼしている（ＸＸ・91）。研究者のネチャーエヴァは具体的にどの部分が削られたのかを検討し、下宿人のマルクが「あなたの頭の中にあるような考えを持つということは」、「それによって皆を誘惑し、悪い手本を示すことになる」ために、「有害というよりもむしろ完全に不道徳でさえある」とプロハルチン氏に述べていることに注目している。そして、ネチャーエヴァはこの後でプロハルチンに噂を吹き込んだ者たちもが、一斉に彼は「気がふれたんだ！」と断言するほどに「おびえてしまった」様が描かれていることに注意を促して、この直前に他の者をも不安に駆り立てるようなプロハルチンの言葉が具体的に記

されており、それが削られたのではないかと想定している[20]。

さらに、彼女はここで登場人物の一人が「つらいのは誰も同じ」と語っていることに注意を促しながら、役所が廃止になるというプロハルチンの確信は帝政ロシアへの信頼を揺るがせるようなものであり、また、ジモヴェイキンが彼を「自由思想家」(vol' nodumets) として「密告してやる」と脅す場面もあるこの作品はドストエフスキーが書いているような「無害すぎる」作品ではないと指摘している[21]。

実際、「お前さんは何者だ？」とさらに問いつめられた主人公は「分かるだろう…中略…おれはおとなしい人間だよ。今日もおとなしい、明日もおとなしい、ところが、そのうちにおとなしくなくなって、乱暴なことを言う。すると軍隊行きだぞ、だ。それで、自由思想家になっちまったんだ」(Ⅰ・256) と狂いかけた頭で答えているのである。

彼女の解釈は、「自由思想」を理由に主人公が「狂人」とされて「社交界」から閉め出されたグリボエードフの戯曲『知恵の悲しみ』を思い起こさせる。この戯曲の主人公チャーツキイのモデルとなったチャアダーエフは、長い外国滞在の後に『哲学書簡』(1836年) を発表しロシアの現状を鋭く批判したことで、「狂人」の烙印を押されていた。裁判の際に「現在のような酷しい検閲のもとでは、グリボエードフやフォンヴィージンのような作家、いやプーシキンでさえ存在できません」と自分が深く敬愛していた作家たちの名前とともに、グリボエードフの名を挙げてロシアの検閲制度を厳しく批判することになるドストエフスキーは、むろんこのことを熟知していた[22]。『知恵の悲しみ』において、このチャーツキイが恋をしているソフィアの父ファームソフは、チャーツキイを「自由思想を宣伝しようとしておる」(Ⅱ・2) と考えており、学問などすることが「気ちがいや、気ちがいじみた事件や思想のふえたもとです」(Ⅲ・21) と手厳しく語り、伯爵夫人もチャーツキイを念頭におきながら、既成の体制を批判する「自由思想家ったら忌々しいですわね」(Ⅲ・20) と語っているのである[23]。

しかも、この戯曲でグリボエードフは単に「噂」の力だけではなく、「噂」というものの発生のしくみにまで迫っている。たとえば、モスクワの貴族ファームソフの名字が、ラテン語の「噂」から作られていることを考慮すれば、それは世間の噂や世間体に自分の考えも左右されるファームソフの性格を的確に物語っている。事実、チャーツキイが自分に不利益をもたらす危険性を嗅ぎ取ったファームソフは、積極的に噂を広めるのに一役買うのである。さらにこの夜会に参加していた将校のスカロズープや秘書のモルチャーリンがソフィアの花婿候補であることを想起すれば、この「噂」はライバルを蹴落とすことができるチャンスでもあったはずでもある。こうして、ファームソフの娘ソフィアが語った「おかしくなったのじゃないかしら」という言葉は、このようなチャーツキイ批判を背景にしてまたたく間に夜会の参加者に広まるのである。

この意味で注目したいのは、ドストエフスキーが『分身』の主人公ゴリャートキンに「だれかが口さがない中傷をでっちあげると、さっそくもう耳をかたむけずにはいられなくなる」と語らせ、「人間ひとりを精神的に殺そうために」連中は噂を広めたと述べさせていたことである。それは「噂」に打ちのめされたチャーツキイが再びヨーロッパへと旅立つ前に語る次のような台詞と酷似しているのである。「あれは何事だ？　聞いた耳が信じられないや！　…中略

…　誰が言い出したんだ？　馬鹿者が本気にして、ほかの者に言い触らす、婆さんどもが、たちまち大騒ぎをはじめて、／そこで世間の輿論というものが出来上がるんだ！」（Ⅳ・14）。

グリボエードフを高く評価していたドストエフスキーは、「自由主義者」という「レッテル」を貼ることによってライバルを蹴落とす「噂」の手法に注意を払っていたのである。ここには『地下室の手記』以降の作品で、「理想」だけでなく「嘘」も語れる「言葉」の性質を詳しく考察することになるドストエフスキーの片鱗がすでに現れているといえよう。『プロハルチン氏』においても「自由思想」や「噂」の問題が、主人公の「発狂」に深く関わっているのである。

だが、短篇作品『プロハルチン氏』は、別の面でも大きな問題を含んでいる。すなわち、主人公は「あなたはナポレオンかなんかだとでも言うんですかい？　この世にはあなた一人しかいないとでも言うんですかい……」と批判されるのである（Ⅰ・257）。

この言葉は『エヴゲーニイ・オネーギン』の中で、現代の人間は「他人をすべてゼロと考え、自分だけが価値のある単位だと思っている。誰も彼もがナポレオンを気取り、幾百万もの二足獣を道具に過ぎぬと見くびっている」と述べたプーシキンの言葉を思い起こさせる。プーシキンはここで「自己」の絶対化が「他者」の否定につながるという重大な指摘をしえていた[24]。さらに研究者のグースは、ドストエーフスキイがペトラシェーフスキイのサークルで「エゴイズムについて」語っていることを指摘しつつ、この文章にナポレオンのテーマだけでなく、『唯一者とその所有』（1844）において、自我の絶対性を主張したシュティルナーからの影響をも見ている[25]。

だが、なにゆえに服装だけでなく食べ物までも切り詰めて生活しながら多くの金を貯めていたプロハルチンがナポレオンと比較されていたのだろうか。ここで興味深いのは、『分身』のゴリャートキンが「これだけの金があれば、人間一匹えらくすることだってできようというもんだ」とうそぶいていたことである。さらに、シベリア流刑後に創刊した雑誌『時代』に載せたルポルタージュ「ペテルブルクの夢」で、ドストエーフスキイは実際に起きた大金を残して死亡した男の話に言及しつつ、この話はプーシキンの『けちな騎士』を思い起こさせたと記している（ＸＸＶ·273-4）。実はこの作品の主人公の男爵も、集めた「きらめく金貨の山」を見ながら、「悪魔かなんぞのように、わしはここから世界を操ることができる」とうそぶくのである[26]。しかし、父によって騎士としての対面も保てないような生活を強いられた男爵の息子アルベールは、父に対する反発を強め、彼らの激しい反目は、結果として息子アルベールによる「父親殺し」につながるのである。

この意味で注目したいのは、ドストエフスキーがペトラシェーフスキイの会でベリーンスキイのゴーゴリへの手紙だけではなく、プーシキンの政治詩『村』も朗読したとミリュコーフが語っていることである。若きプーシキンはこの詩において、地主の非道さを厳しく批判するとともに「ここではうら若い娘たちが花ひらくのも／無慈悲な悪人の気まぐれのため」と乙女たちの悲劇を歌っていたのである[27]。母には辛く当たって病死に至らしめただけでなく、さらに自己の権力を行使して農奴を虐待し、農民の娘を妾にまでして、なおかつ己の行為に疑いを抱くことはなかった父ミハイルの言動を見ていた若きドストエフスキーがどのような思いでこの詩を朗読したかを想像するのは難しくない。

こうして、莫大な金を貯め込みつつ、困窮のうちに亡くなった官吏を描いた『プロハルチン氏』は、プーシキンの『村』という詩や『けちな騎士』という作品を通して見るとき、「父親殺し」という重いテーマをも秘めていたことが分かる。

この意味で注目したいのは、ドストエーフスキイがこの『プロハルチン氏』を描いた後で、幻想的な小説『家主の妻』を書いていることである。新しく部屋に引っ越してきた主人公の若者が、老年の家主の若い妻カテリーナに恋をするというテーマを描いたこの小説からは、あたかも霧の中で事件が起きているような感すら受ける。

しかし、グロスマンは「人との交わりを避け」て、「教会史」のようなものを書いている主人公の若者が、「真理」を掲げて独創的な「体系」を樹立しようと研究していると記されていることに注目している[28]。そして、彼は「1840年代において『体系』なる用語は、通常、ユートピア社会主義の諸思想体系と結びつけられて用いられていたこと」や、フォイエルバッハやシュトラウスの著述においては、キリスト教に対する批判が「教会史」の形で述べられていたことを指摘して、主人公がこの時期のドストエフスキー自身に近い「思想的探求」をしている人物だろうと想定しているのである。

一方、ジラールは老家主の妻カテリーナが、「謎に包まれた老人ムーリン」の共犯者として、自分の「両親を殺害」したという過去があったことに注意を促している[29]。そして彼は、父と息子の対立のテーマを分析しながら、「ある意味で父親と息子は同一である」ので、非道な「父親は『他者』として憎まれるが、もっと深いところでは『自己』としての羞恥心の対象」であり、「圧制者＝父親に向けられた奴隷＝息子の犯罪」といえる「父親殺し」は、「殺人であると同時に自殺」でもあると結論している[30]。

このように見てくる時、「父親殺し」という重いテーマを含んだ『家主の妻』が幻想性を帯びたのはやむをえなかったと言えるだろう。ジラールは「『家主の妻』以降、父親殺しのテーマへの暗示はしだいに増えていく」と指摘しているが、ここで重要なのはこのテーマをすでに初期の作品で取り上げたドストエフスキーの作家的な勇気であろう。

第3節　権力の腐敗と良心の問題 ──『ポルズンコフ』をめぐって

ところで、ドストエーフスキイの『貧しき人々』を高く評価したベリーンスキイは第二作については、「創造的才能と思想的深さ」を随所でみながらも、そこにあまりにも多くのゴーゴリからの影響を見て、「『分身』は巨大で強烈な、しかしまだ若くて経験に乏しい才能の烙印をおびている」といくぶん冷ややかに評価した[31]。そして、ベリーンスキイは、次の『プロハルチン氏』には厳しく、『家主の妻』に対してはその幻想性を酷評した。こうして、ドストエフスキーは次第に彼とそのサークルとは疎遠になっていく。

『家主の妻』に対するベリーンスキイの厳しい批判には、もう一つの側面があったと思われる。それはゴーゴリが、この年の初めに『友人達との往復書簡選』を出版していたことである。この頃ゴーゴリは、『死せる魂』の第二部で主人公チチコフの回心を描こうとしていたが、この試みはなかなかうまくいかず、それまで書きためていた原稿をすべて燃やしてしまうなど精

神的に追いつめられていった。こうした精神的危機の中で出版されたのがこの著作であり、これは『友人達との往復書簡選』（以下、『書簡選』と略す）と名付けられてはいたがここに載せられていたのは「ゴーゴリひとりの書簡集」で、ゴーゴリはここで「官製国民性」を高く掲げて、自己を棄てた「国家への奉仕」こそがロシアの危機を救うと主張したのであった[32]。

この作品からもっとも烈しい衝撃を受けたのは、おそらくゴーゴリを高く評価していたベリーンスキイであろう。彼は雑誌『現代人』の二月号でこの作品を批判したが、ゴーゴリからはベリーンスキイが自分の意図を全く誤解しているとの手紙を受け取った。これにたいしてベリーンスキイは7月に烈しい批判の手紙を書いたのである。

ドストエフスキーの『家主の妻』が『祖国雑記』に発表されたのが、10～11月のことであり、ベリーンスキイがこれに対する酷評を手紙に記したのが11月であった。このような経過を考慮するならば、ドストエフスキーのうちにゴーゴリを継ぐ新しい才能を見たベリーンスキイの評価の厳しさには、ゴーゴリへの落胆が大きく作用していたことが充分に予想されるのである。ここでは法律や憲法をめぐる当時のロシアの状況やゴーゴリの作品が果たした意味を確認しておきたい。

ロートマンはロシアでは厳しい官等制度を定めたにもかかわらず、ピョートル大帝の改革以降も「職権濫用は異常な速度で広がっていった」と指摘し、それは「苛酷な官僚主義の原理にたいして、実生活はまず職権濫用（時には法外な悪用）という形で対抗した」からだと説明している[33]。

皇帝の「専制」が国是とされ、また領主の裁判権が認められていたロシアでは、このような問題を議論することは難しかったのだが、このような中で「笑い」という手法により、この問題を真正面から取り上げたのがゴーゴリであった。

たとえば、ゴーゴリは死んだ農奴を安く買い集めようとする詐欺師のチーチコフと様々な領主との奇妙な取引の様子を徹底的に戯画化した『死せる魂』（ロシア語では「魂」を表す単語と「農奴」を意味する語が同じであったために、『死せる農奴』とも訳せる）の第一部を1842年に書き上げていた。土肥恒之が書いているように、人頭税を払う際の基礎的なデータを示す人口調査が十年に一度しか実施されなかったために、領主は次の人口調査が行われるまで、死んだ農民の「人頭税」をも払わねばならないという不備も抱えていた[34]。それゆえ、チーチコフはロシア各地を馬車で訪れて、「人口調査簿（戸籍）」のうえでは生きている「死んだ農奴」を買い取り、これらの「農奴」を担保にして銀行から大金を借り受けようとしたのである。こうして、笑いを通して当時の農奴制の実体を鋭く暴いたこの作品は、西欧派の知識人たちからもたいへん高い評価を受けていたのである。

さらにゴーゴリは、旅行中の若者を私人の格好でひそかに各地を訪れている勅命の「検察官」と間違えて、彼を自宅に招くなど接待した地方の官僚と、その誤解を利用して様々な歓待を受け、また「借りるだけならば」賄賂にはならないとして、彼らから金を巻き上げた若者のやりとりを描いた喜劇『検察官』を書いて、一躍時代の寵児となっていた。

商人たちから高価な品物を贈り物として強要する市長や賄賂を受け取ることを公言している

判事、さらには「国家の安全」のためを理由として私人の手紙を開封する郵便局長などの地方官僚の実態を鋭く暴いたこの作品は本来ならば検閲を通るはずはなかった。しかし、ゴーゴリびいきの貴族たちが皇帝の前で朗読してじかに許可を得たこの作品は、最後に本物の勅命「検察官」の到来が伝えられるという工夫により、ちょうど「水戸黄門」のように、法秩序を守る皇帝という側面が強調されることになり、上演も許されて大成功を収めていたのである。

それゆえ、ベリーンスキイは『死せる魂』を論じた1842年の論文で「我々はプーシキンよりも、ゴーゴリの内にロシア社会にとってより重要な意義を認める。なぜならば、ゴーゴリはより社会的な詩人であり、それゆえ時代により合った詩人なのである」と述べた[35]。戯曲『検察官』や『死せる魂』のテーマを与えられるなどプーシキンに多くを負っていたゴーゴリさえも、「今ではプーシキンを繰り返してはならない。現在我々の規範となるべきなのはプーシキンではない」と述べたのであり[36]、ドストエフスキーも『死せる魂』に熱中して暗記するほどに読んでいたのである。こうして、ドストエフスキーが文壇に登場した1846年は、ゴーゴリの影響下に、法律の問題をもきちんと議論しようとする動きが高まった時期だったのである。

川端香男里はこの年から始まる2年間に、ゲルツェン、ゴンチャローフ、トゥルゲーネフ、そしてネクラーソフ、グリゴローヴィッチなど「『自然派』に属する目覚ましい作家が次々と現れた」ことを指摘している[37]。ピエール・パスカルもこの当時のロシアについて「じっさい知的活動がこれほど盛んだったことはかつてなかった。人々は国民の運命について自分自身に質問を課せた。ロシアは独自の世界なのか、それとも西ヨーロッパの発展につき従っていかねばならないのか。こうした質問がいろいろなサークルや雑誌上で討議された」と書いている[38]。この時代はニコライ一世治世下の30年の中で、唯一「雪解け」の可能性を感じさせた期間といえるだろう。

たとえば、クリミア戦争後の「大改革」の時代に「農奴制」廃止にむけて指導的な役割を果たすことになるカヴェーリンは、この頃モスクワ大学の法学部で法制史を教えており、また、自宅では日曜日ごとに「談話会」を開いて農奴制をめぐる議論を行っていた[39]。また、ベリーンスキイが1847年に『同時代人』の復刊第1号を刊行すると、彼は「1846年のロシア史学界についての見解」や「旧ロシアの法習慣についての見解」の二論文を発表し、後者で「ロシア民族の自己認識の時代」が訪れた1840年代に「真の意味での歴史学の基盤が形成された」と述べたのである[40]。

また、ドストエフスキーが寄宿学校で教わったロシア語教師のビレーヴィチがノヴィコーフの代表作とも言える『ロシア人作家についての歴史辞典の試み』を弁護する論文を書いているのも1847年である。彼はここでノヴィコーフが学校の設立や飢餓からの農民の救済活動にもかかわったことにも簡単に触れるとともに、啓蒙的な活動の意義に多くの頁を割いて彼が「大衆の要求に答え、彼らに読書の機会を与え、文学者を教育した」ことの意義を強調し、これこそ「現代的な理念の普及者の一番の意義である」と述べた[41]。農奴の解放や出版や言論の自由を求めていたドストエフスキーの意識もこれに重なるであろう。事実、流刑後の「大改革」の時期に、彼は兄ミハイルと共に雑誌『時代』や『世紀』などを出版して知識と教育の普及に努めることになるのである。

ここで注目したいのは、「良心」（sovest'）という単語がドストエフスキーのこの時期、すなわちドストエフスキーがペトラシェーフスキイのサークルに関与していた時期に比較的多く用いられ、しかも重要な意味を持っていることである。

もともと「共―知」を意味するギリシャ語からの翻訳語であったこの単語は、「一種の道徳意識としてのコンシャンスconscience（英語、フランス語）、ゲヴィッセンGewissen（ドイツ語）の訳語として」、「人間に固有の善心」を意味する『孟子』の中の〈良心〉という言葉が、日本で定着したものである[42]。良心の問題は、近代ロシアや日本の「法意識」にも係わるので、少し詳しく見ておきたい。

この単語はキリスト教の初期にもパウロなどによって多く用いられ、「律法」が絶対的な力を持っていたユダヤ教からキリスト教が自立する際に、大きな役割を演じた。さらに、近世に至るとカトリックでは「免罪符」を乱発するなどの腐敗が目立つようになってきたが、教皇に神の代理人としての地位が与えられている以上、それを批判することは許されなかったのである。このような中で教会の腐敗を批判したプロテスタントにおいては「知」の働きを持つ「良心」に、神の代理人である「教皇」であろうとも、不正を行っている場合にはそれを正すことのできる＜内的法廷＞としての重要な役割が与えられたのである。

たとえば、ドストエーフスキイにも強い影響を与えたロシアの劇作家フォンヴィージンの喜劇『親がかり』では、「誰もが美徳の人になれるのでしょうか？」という姪の問いに対して、スタロドゥームは「良心に責められることをしないこと」だよと答え、さらに「いいかい、良心は、いつでも友人のように、裁判官が罰するより一足さきに、警告するのだよ」と説明している[43]。

この作品で「良心」は、「心の裁判官」とでも言えるような働きをし、当時の「法律」では問われないような問題や自分にとって不利な場合でも社会的な不公正には異議を唱える内面の声としてあらわれているといえるだろう。さらに、フォンヴィージンは短篇小説『カリスフェン』（1786年）において、アリストテレスの甥の実在の歴史家をモデルにして、自らを神と見なすようになったアレクサンドロス大王に真理を告げることにより自らの命を賭けて諫め、殺された哲学者の姿を描いた[44]。それは息子パーベルが成人して退位すべき時が来ても、自らの権力を手放そうとしなかったエカテリーナ二世への鋭い批判でもあり、またこのような気ままを制限するためには「憲法」が必要なことを説いたものでもあった[45]。

つまり近代のロシアにおいても、皇帝に絶対的な主権が与えられていたので、その命令がいかに苛酷なものであっても「ロシアの法」の範囲内ではそれを批判することは出来なかった。それゆえ、改革を求める流れにおいては、皇帝の権力に対抗できるような「良心」（共―知）や「憲法」が重要視されたのである。

この意味において注目したい作品が、賄賂によって動く官僚制度の問題に言及しているとともに、初期の作品で唯一『知恵の悲しみ』からの引用があるドストエフスキーの『ポルズンコフ』（1848年）である。この短篇は4月1日のエープリル・フールに掛けた軽い物語であるが、江川卓は他人に対してぺこぺこする男という意味の名字を持つこの作品の主人公が、「ドストエフスキーの生涯を通じての重要なモチーフである『道化』の原型をなして」いると指摘して

いる[46]。

この作品で主人公のポルズンコフは、賄賂を取ったことを認めながら「よしや我、数多く見し／自由主義者にならんとも」[47]と語った後でいささか唐突な感じで「祖国のものは煙さえも甘くて快い」というチャーツキイの言葉を引用している。ここで彼は、『知恵の悲しみ』の共通の理解を前提にしながら、自由主義者になったとしても「祖国のものは煙さえも甘くて快い」と続けることで、チャーツキイのような自由思想家にとっても祖国の煙が甘いように、祖国の賄賂も甘いことを言外に匂わせて聴衆におもねているのだ（Ⅱ・8）。

そして、ポルズンコフは賄賂を「たくさんよこしたかね？」という問いに対して、「まあ、現代人のあるものが自分の良心を、ありったけのヴァリエーションで売る、それくらいの額ですがね……ただし、良心に金を出すものがあれば、の話なんで。しかし、わたしは金をポケットへ入れた時、煮え湯を浴びせられたような気がしましたよ」と答えている。

ポルズンコフはさらに、自分を陥れた上役に「面と向かって、卑怯者、と言ってやろうとしましたが」と語りながら、「なんだかそれが口から出ませんでしたよ」と続けておちをつけて笑いを買っている。

こうして彼は正義を求めながら何も出来ずに終わっている。しかし、中村健之助が指摘しているように、ポルズンコフは道化を演じながらも「どこか高潔なところ」を残しており、この作品は「見ばえのしない小役人のみじめな境遇に同情し、彼の『尊厳』を回復しようとする」ものとして読まれるべきだろう。

私達も結末の部分に注意を払いたい。ここで、ポルズンコフは自分の無能さを披露して皆を笑わせながらも、その一方で笑いによって反発を弱めながら、上役の悪事を暴き、彼が「卑怯者」であることを聴衆に納得させえているのである。この時、彼は自由思想をからかいつつも、ゴーゴリのように「笑い」を通して「腐敗した貴族社会」を暴露し、卑屈な形ではあるが自由思想の一端を表明していたと言えるのではないだろうか。

第4節　ゴーゴリとベリーンスキイの論争――「国民の道徳」をめぐって

ゴーゴリの『書簡選』が出版されたのは、このような時期だったのである。ゴーゴリはここでも「汚職」や「裏取引」が「人間の手段をもってしてはどうにもならぬほど多い」ロシアの現実を厳しく指摘して、「ロシアはまさに不幸である」と断言した。

しかし、このような現状認識を示しつつもゴーゴリは、ここでその原因をロシアにおける法律の不備や憲法の欠如に求めるのではなく、人々が「物質的利益に誘惑されエゴイズムに盲いて、よきロシア的伝統を見失っている」ためだとした。そしてゴーゴリは、「自己のための自己を全て殺し、全てをロシアに捧げ、ロシアにあって活動しなさい」として、制度的な腐敗を生み出している政府にではなく、その腐敗に苦しむ国民に対して道徳を説いたのである[48]。

しかも、ゴーゴリは神によって支配する者と支配される者が選別されているのだとして、「支配される立場に生まれた彼ら百姓たちが、その下に生を受けた権力に従順たらねばならぬ」ことを強調し、「国家内の全ての階級・全ての個人が己の分と義務を弁え」るように、ロシア

人の教育にあたっては、「彼の属する階級の諸々の義務を教えこむこと」が必要だとも記していた。このようなゴーゴリの論述は、個人の自立を阻むものとしてまさにドストエフスキーが『貧しき人々』で否定していたものであった。

ゴーゴリのこの作品は、彼を庇護していた貴族のアクサーコフやモスクワ大学の教授シェヴィリョーフなどスラヴ派の知識人たちをも怒らせ、前者はゴーゴリの「謙譲の衣を被ったおそるべき傲慢」を指摘し、また後者も「ロシアは君を栄光の高みへ持ち上げることで、君の内に自惚れを培った」とし、「信仰による自惚れとは、ひとつの畸形だ」と批判した[49]。

だが、農奴制や体刑までも擁護し、民衆にとって読み書きの知識は有害であるとすら説いたこの書物から一番強い衝撃を受けたのは、おそらくそれまでゴーゴリを高く評価していたベリーンスキイだろう。ベリーンスキイは「虚偽と背徳が宗教の衣を被り笞に守られ、真理と善行として説教される時、口を噤(つぐ)んでいることはできない」としてペンを取り、「文学のみが、タタール的な検閲に苦しみながらも、いまだ活力と前途」を示していると激しい怒りの手紙を記したのである[50]。そして、ゴーゴリが擁護した当時のロシア正教会とキリストとを対置しながら、キリストがこのロシアの現状を見たならばそれを黙認している正教会の側にではなく、その改革のために苦闘している我々の側にたつだろうとも主張したのである。

それとともに、ベリーンスキイは「こんにちロシアの最も焦眉の国家的課題とは農奴制の撤廃、体刑の廃止」を挙げるとともに、「せめて既に存在する法律の可能な限り厳格な施行である」とし、「このことは政府自身すら感じ取っている」と記していた。実際、クリミア戦争の敗戦の後にロシア政府は、「農奴制の撤廃」だけでなく、それを可能にするための法律の改革に取りかかることになるのである。

ただここで注目したいのは、「正教と専制」は否定しつつも、ベリーンスキイがヘーゲルの哲学体系に従って、「民族的な誇りというものは気高い高貴な感情」であるとして、「真の意味における国民性の否定あるいは無視は民衆を辱(はずかし)めること」であるとしていることである[51]。ここには『哲学書簡』を書いたチャアダーエフとプーシキンとの論争を踏まえたうえでの比較文明学的な歴史認識があるといえるだろう[52]。それとともに、ベリーンスキイが自国の欠点を批判されると怒り出すような「民族的な高慢さや傷つきやすい自尊心」を、遅れた民族の特徴と見なして批判していることにも注意をはらっておきたい[53]。

このようなベリーンスキイのゴーゴリ批判との関連で重要だと思われるのは、ドストエフスキーがシベリアの流刑地で書いた喜劇的な長編小説『ステパンチコヴォ村とその住民』(1859年)である。ここでドストエフスキーは貴族の館に居候しながら道徳を説くフォーマ・フォーミッチ・オピースキンという人物を描いている。まず注目したいのは、この人物のフォーマ・フォーミッチという名前と父称が、『知恵の悲しみ』に出てくる「三代の大臣に勤続して課長を勤め」、その文章は「ここでは皆の模範とされている」人物と全く同じであることである。チャーツキイはこの人物を「立派な男だ。実に無能で、あんな訳のわからない奴はない！」と切り捨てているが、ドストエフスキーも自分の小説でこの人物を、根は小心だが道徳的な言葉を吐きつつ、自分より弱い者に対しては、自分の権力を見せつけ、いじめたり、からかったりすることが好きな道化的な男として、徹底的に戯画化しているのである。

研究者のトゥイニャーノフは当時、ゴーゴリもまた貴族アクサーコフの館に住んでいたことや、オピースキンの語る言葉がゴーゴリの『書簡選』の文体や思想を反映していることから、この作品でドストエフスキーはゴーゴリをパロディ化したとし、ここには『書簡選』におけるゴーゴリの思想への批判が現れていると結論した[54]。さらに、アカデミー全集はこのころにゴーゴリの回想録が出ていたので、ドストエフスキーは当時のゴーゴリの言動を知り得たのだろうとし、その注においてオピースキンと『書簡選』におけるゴーゴリの文体や表現、思想の詳しい比較をしている[55]。

こうして『ステパンチコヴォ村とその住民』のオピースキンという人物像は、『書簡選』を読んだ時のドストエフスキーのゴーゴリに対する強い反感をも示していると思える。そして、それは一人ゴーゴリのみに係わることではなく、ウクライナの親類といわば決別することによって立身出世を遂げたドストエフスキーの父ミハイルの精神にも深く係わるだろう。

ここで注目したいのは、ゴーゴリの『書簡選』が出版された年に、ウクライナ語で詩を書いていたシェフチェンコなど「キリル・メトディ団」が逮捕されるという事件が起きていたことである。「周辺」の言語とした「方言」を積極的に用いることは、「国民国家」フランスの成立以降、どの国でも「中央」の言語として重要視されてきた「国語」の権威を揺るがすものとして危険視されたのである[56]。

一方、ウクライナ出身のゴーゴリが「われわれはロシア語で書くべきなのだ」とし、「われわれ全スラヴ人にとって主権を有するひとつの言葉を擁護し、強固なものにしてゆかねばならない」と主張していた[57]。自らの育ったウクライナ語の世界を棄てることは、ウクライナ出身の作家ゴーゴリやドストエフスキーの父ミハイルにとっても、自らのアイデンティティの基盤をもゆるがす行為であったこともたしかであろう。そのためにマイノリティ出身の「個人」は、自分に「立身出世」の機会を与えてくれた「国家」の一元的な価値への依存をいっそう強めることになったのである。

ただ、青山太郎は激しい論争を行いまったく正反対の位置にいると見えるゴーゴリとベリーンスキイが、「共にロシアの現状を憂うることには変わり」なく、また、「個人の使命を同胞への奉仕、社会の福祉への奉仕の内に見ていた」点でも、「彼らは同じ地盤に立っていた」とするゲルシェンゾーンの見解を紹介している。そして言語という面では、ゴーゴリだけでなく「革命的民主主義者」のベリーンスキイも、ウクライナ語で詩を書くシェフチェンコに批判的だったのである[58]。

この意味で注目したいのは、「近代政治史」を「さまざまの特権を持った中間集団を国家が打ち砕く過程」であるとした社会学者の作田啓一が、近代化の過程の「闘争を通じて、中世的な共同体は衰退してゆき」、「国家の成長に伴って個人主義が発展してきた」と説明していることである[59]。

一見、古い専制君主国家に見えるロシアの場合もこの例外ではない。ピョートル大帝以降のロシアも、西欧の列強に伍するために「富国強兵」という「国益」に貢献できる「個人」を優遇して立身出世を可能にしたのである。ウクライナというロシアの辺境出身のドストエフスキーの父ミハイルも、「軍医」という職務をとおして「祖国戦争」に従軍し「国益」に寄与して

世襲貴族となり、村を購入して領主となったのである。ただ、「専制」を国是としたロシアでは、村の領主にも裁判権など絶対的な権利を与えていた。そして、立身出世して貴族になった者たちの多くは、「国家に栄光をもたらした」以上、自分たち貴族が「特別の権利」を有するのは当然だと考えたのである。

青山太郎はゴーゴリの精神的危機を「古いイデオロギー的な伝統を有さぬ国ウクライナに生を受けたゴーゴリは、ロシアに入れ揚げることでロシア人に勝るロシア・ナショナリストとなった」と分析している。若きドストエフスキーも、ゴーゴリのうちに自分が育った大地から切り離されたゆえに、アイデンティティの危機に陥って国家の権威に仮託して「国民の道徳」を説くようになった知識人の姿を見たといえよう。

ドストエフスキーはペトラシェーフスキイ事件裁判において、「もし私に自分の個人的意見を述べる権利、あるいは強圧的な意見には同意しない権利が無いというのなら、何のために私は学んだのでしょうか」と反論するとともに、なぜベリーンスキイの手紙を読んだのかという法廷での問いに対しては、「文学上の記念的作品」であるからと釈明するとともに、ベリーンスキイを「人間としてこの上もなく素晴らしい人でした」と高く評価したのである[60]。

そしてドストエフスキーは、自由思想家というレッテルを貼られることを極度に恐れていた自分の作品の主人公たちとは正反対に、次のように宣言するのである。「自分は祖国に対して善いことを希う権利があるのだと感じている人、そういう人が全て自由思想家と呼ばれるのなら、それと同じ意味で私は自由思想家です」[61]。

「正教・専制・国民性」の理念を守ることが義務づけられていた当時のロシアにおいて、ドストエフスキーがこの手紙を朗読しただけでなく、ベリーンスキイをも弁護したことの意味は重い。事実、ドストエフスキーは「正教と皇帝の主権」を犯した手紙を読んだことなどを理由に死刑を宣告されることになるのである。

第6節　日露の「文明開化」の類似性

だが、このような問題と直面したのは、ロシアだけではなかった。日露戦争で西欧の大国ロシアを奇跡的に破った日本でも、ロシアの場合と同じようなことがおきた。

すなわち明治維新に際し、明治政府は廃藩置県を断行することにより、それまで自治を許していた「藩」という「中間集団」を廃止するとともに、「方言」をも厳しく取り締まって「地方的な文化」の土壌を排除して、強大な中央集権国家の設立を目指したのである。小学校教員として日本の近代化を担う中で「方言」の排除にも深く係わった石川啄木は、「ふるさとの訛(なまり)なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聴きに行く」と歌った。そこには「地方文化」を失うことがアイデンティティの危機につながるという意識が現れている。

さらに、「文明開化」の急速な流れの中でヨーロッパ文明への劣等感を強めていた日本では、日露戦争後に自国を神国化する「国粋」的な思想が広がり、外国の書物の輸入が禁止されたばかりでなく、国内での検閲も強まり、学校でも軍事教練が行われるなど、福沢諭吉が「野蛮」と見なして厳しく批判したニコライ一世の「暗黒の30年」ときわめて似た政治状況に陥ったの

である[62]。

司馬遼太郎はロシア帝国の高級官僚たちとの類似を意識しながら、日本でも日露戦争のあとで「教育機関と試験制度による人間が、あらゆる分野を占めた」が、「官僚であれ軍人であれ」、「それぞれのヒエラルキーの上層を占めるべく約束されていた」彼らは、「かつて培われたものから切り離されたひとびとで」あり、「わが身ひとつの出世ということが軸になっていた」とした。そして司馬は、これら立身出世した者たちの多くは「自分たちが愛国者だ」と思い、「愛国というものは、国家を他国に対し、狡猾に立ちまわらせるものだと信じていた」とし、軍人だけでなく、「それを支持したり、煽動したりする言論人の場合も、そうだった」と厳しく批判したのである[63]。

この時司馬は、「国際化」に対応するために個性の尊重を謳いながら、多発するようになった青少年犯罪を「行きすぎた欧化」のせいであるとして、「権威」や「国家」への「服従」を求める「国粋」的な傾向を強めている教育のもとで、日本の国民は再び彼が「昭和初期の〈別国〉」と呼んだ時期と同じように、命令に「従順な羊」になり始めているのではないかという深刻な不安を示したのである[64]。

比較文明学の視点からロシアと日本の近代化を比較した山本新は、「100年以上の距離をおいて二つの文明のあいだに並行現象がおこっている」と分析するとともに、日本ではこのような「欧化」と「国粋」の激しい振幅がほぼ20年で周期的に交替していることを指摘した[65]。このような山本の理論を深めた吉澤五郎は「欧化と国粋」の「振り子の揺れにも似た振幅」が、現代にいたっても続いていることの危険性を確認している[66]。

実際、様々な分野で「グローバリゼーション」という名のもとに画一化が進む一方で、それに対抗する形でナショナリズムが世界の各地で野火のような広がりを見せている現在、「欧化と国粋」のサイクルの克服は焦眉の課題といえよう。

注

*1 福沢諭吉『福沢諭吉選集』第4巻、岩波書店、1981年、291頁。福沢諭吉のロシア観については、外川継男「明治維新前後の日本人のロシア観」中村喜和・トマス・ライマー編『ロシア文化と日本──明治・大正期の文化交流』彩流社、1995年参照

*2 高野雅之『ロシア思想史──メシアニズムの系譜』早稲田大学出版部、1989年、182頁

*3 プーシキン著、郡伸哉訳『青銅の騎士』群像社、2002年、135～170頁参照

*4 神川正彦『比較文明の方法── 新しい知のパラダイムを求めて』刀水書房、1995年、75～8頁、および伊東俊太郎・梅棹忠夫・江上波夫監修、神川正彦・川窪啓資編『講座比較文明』第1巻、朝倉書店、1999年参照

*5 ロートマン『ロシアの貴族』筑摩書房、桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳、1997年、20～57頁参照

*6 Dostoevsky, F.M. Polnoe sobranie sochinenij v tridtsati tomakh, Leningrad, Nauka（以下、PSSと略す） 訳は新潮社版の『ドストエフスキー全集』から引用させて頂いたが、引用頁

数はアカデミー版のドストエフスキー全集の箇所を括弧内に巻数は漢数字で、頁数はアラビア数字で示した。

*7　高橋「『貧しき人々』における自己と他者の認識――比較文明学の視点から」東海大学紀要第23輯、外国語教育センター、2002年参照

*8　ペレヴェルゼフ、長瀬隆訳『ドストエフスキーの創造』みすず書房、1989年、28～9頁

*9　ルネ・ジラール、鈴木晶訳『ドストエフスキー：二重性から単一性へ』法政大学出版局、1983年、122頁

*10　竹内洋『立身出世主義――近代日本のロマンと欲望』ＮＨＫ出版、1997年参照

*11　福沢諭吉『福沢諭吉選集』第3巻、岩波書店、1980年、57～58頁

*12　バフチン、新谷敬三郎訳『ドストエフスキイ論』冬樹社、昭和49年、371頁

*13　川端香男里『薔薇と十字架――ロシア文学の世界』青土社、昭和56年、72～4頁

*14　プーシキン、神西清訳『スペードの女王』、(『ベールキン物語』) 岩波文庫、昭和42年参照

*15　レイン、坂本健二・志貴春彦・笠原嘉訳『ひき裂かれた自己』、みすず書房、57頁

*16　レイン、志貴春彦・笠原嘉訳『自己と他者』みすず書房、161～2頁

*17　Dmitri Chizhevsky, The Theme of the Double in Dostoevsky, “Dostoevsky, A Collection of Critical Essays” 高橋「ドストエフスキーの小説における分裂の問題とその意味」『文明研究』第1号、東海大学文明研究会、1982年参照

*18　桜井哲男『「近代」の意味――制度としての学校・工場』ＮＨＫブックス、1984年、58～9頁

*19　小池滋『英国流立身出世と教育』岩波新書、1992年、135頁より引用

*20　Nechaeva,V.S., Rannij Dostoevsky, 1821-49, Nauka, M.,1979,p.170

*21　Nechaeva, V.S.,,ibid.,pp.171-3

*22　ドストエフスキーによる『知恵の悲しみ』の考察については、高橋「ドストエーフスキイとグリボエードフ――初期作品をめぐって」『ドストエーフスキイ広場』創刊号、ドストエーフスキイの会、1992年、および Takahashi S. Dostoevsky i “Gore ot uma”, Dostoevsky i mirovaya kul’tura, 1995, pp.118-126　参照

*23　グリボエードフ、小川亮作訳『知慧の悲しみ』岩波文庫、アラビア数字は何幕目かを、漢数字は何場かを示す。引用に際しては一部、変えさせて頂いたところがある。なお、米川正夫訳の『知恵の悲しみ』(『ロシア・ソビエト文学全集』第1巻、平凡社、1966年) も参照

*24　プーシキン、池田健太郎訳『オネーギン』岩波文庫、32頁、

*25　Gus, M.S., Idei i obrazy F.M.Dostoevskogo, Khud.lit., M, 1971 pp.207-211

*26　プーシキン、郡伸哉訳「けちな騎士」、前掲訳書、64～67頁

*27　プーシキン、草鹿外吉訳『村』(『プーシキン全集』第1巻)、86～6頁

*28　中村健之助『作家の誕生』みすず書房、1979年、84頁より引用

*29　ルネ・ジラール、前掲訳書、114頁

*30　同上、122～3頁

*31　Belinsky,V.G.,Sobranie sochinenij v devyati tomakh, vol.8, M.,Khud.lit.,1982,p.141

*32 青山太郎『ニコライ・ゴーゴリ』河出書房新社、昭和61年、478頁
*33 ロートマン、前掲訳書、54頁
*34 土肥恒之『「死せる魂」の社会史──近世ロシア農民の世界』日本エディタースクール出版部、1989年参照
*35 Belinsky, V.G. ibid.,vol.5,p.62
*36 Kirpotin, V.Ya, Dostoevsky-khudozhnik,M.,Sovetskij pisatel',1972,p.49
*37 川端香男里『ロシア文学史』岩波全書、1986年、181頁
*38 ピエール・パスカル、山本俊郎訳『ロシア史』文庫クセジュ、1970年、114頁
*39 杉浦秀一『ロシア自由主義の政治思想』未来社、1999年、34～5頁。なお、杉浦はここでカヴェーリンが、モスクワ大学の学生だったベリーンスキイを家庭教師として、モスクワ大学への受験勉強を行い、生涯彼を尊敬していたことも指摘している
*40 同上、60～1頁
*41 Nechaeva,V.S., ibid.,p.52　なお、寄宿学校時代のドストエフスキーについては、高橋「ドストエーフスキイとロシアの啓蒙思想」『東海大学紀要外国語教育センター』第16輯、1995年参照
*42 吉沢伝三郎「良心」『平凡社世界大百科事典』第29巻、1988年、700頁
*43 Fonvizin,D.I.,Nedorosl' //D.I.Fonvizin,dramaturgiya,poeziya,proza,M.,Pravda,1989,pp.126－7
*44 Ibid.,pp.232-233
*45 Makogonenko,G.P.,Drug Svobody,D.I.Fonvizin,,M.,Pravda,1989,pp.17-19
*46 江川卓解説、『ドストエフスキー全集』第1巻、471頁
*47 米川正夫訳、『ドストエーフスキイ全集』第2巻、河出書房新社、407頁
*48 青山太郎、前掲書、479頁
*49 同上、513～4頁
*50 原卓也「デカブリストからペトラシェフスキー会まで」『ドストエフスキーとペトラシェフスキー事件』集英社、昭和46年参照
*51 ディヤコフ、早坂真理・加藤史朗訳『スラヴ世界──革命前ロシアの社会思想史から』彩流社、1996年、172頁
*52 この論争については高橋『欧化と国粋──日露の「文明開化」とドストエフスキー』刀水書房、2002年、171頁参照
*53 ディヤコフ、前掲訳書、172頁
*54 トゥイニャーノフ、水野忠夫訳「ドストエフスキーとゴーゴリ―パロディの理論に寄せて」『世界批評体系』第7巻、筑摩書房、1975年、236～243頁参照
*55 PSS.,vol.3,pp.502-3
*56 田中克彦『ことばと国家』岩波文庫、1981年参照
*57 青山太郎、前掲書、577頁
*58 同上、524～5頁
*59 作田啓一、『個人主義の運命──近代小説と社会学』、岩波新書、1981年、90～3頁

*60　ベリチコフ編、中村健之介編訳『ドストエフスキー裁判記録』、北海道大学図書刊行会、1993年、91～2頁

*61　同上、78頁

*62　「暗黒の30年」と呼ばれるニコライ一世の時期と司馬遼太郎が「別国」と呼んだ昭和初期の比較については、高橋「司馬遼太郎のドフトエスキー観――『欧化と国枠』の視点から」『ドフトエスキイ広場』12号、2002年、および高橋「司馬遼太郎の夏目漱石観――比較の重 要性の認識について」『異文化交流』第4号、2002年参照

*63　司馬遼太郎『ロシアについて――北方の原形』文春文庫、1989年、254～5頁

*64　高橋『この国のあした――司馬遼太郎の戦争観』のべる出版企画、2002年、179～180頁

*65　山本新『周辺文明論――欧化と土着』神川正彦・吉澤五郎編、刀水書房、1985年、170～9頁

*66　吉澤五郎『世界史の回廊――比較文明の視点』世界思想社、1999年、98頁